



鈴木康友市長がマニフェストの柱に掲げる「こども第一主義」。本誌では、このテーマを創刊号と第2号の2回に分けて取り上げます。今回のパート1は、就学前の子育て支援に対する行政の現状と今後の課題に関するリポートです。

子育ててケアは 「お腹の中から」

助産師がサポートし
主体的なお産を目指す

最近、よく聞かれる「お産難民」という言葉。総合病院が多く、医療サービスが充実しているとされる浜松でも、決して

無縁の問題ではありません。産科医の不足や、里帰り出産を含むほかの市町村からの分娩希望者の流入により、安心してお産をできる場が不足するという事態が心配されています。

そうした中、注目を集めているのが来



「バースセンター」に勤務予定の助産師などのスタッフ

年4月、県西部浜松医療センター（中区富塚町）内にオープンする「メディカルバースセンター」です。この施設は、助産師が妊娠初期から出産までをきめ細かくサポートすることに、妊産婦の自然のリズムを尊重した「主体的なお産」を目指すのが特色。バースセンター設立で中心的な役割を

果たしている浅野仁・浜松医療センター周産期センター長は、次のように施設への思いを語ります。

特集

わたしたちには 夢がある

こども第一主義の「これから」 Part:1

「今回、設立されるバースセンターは、いわゆる院内助産院ではなく、医師、助産師、看護師などの医療スタッフがそろい、必要な時にはいつでも高度医療を提供できます。また、子育てNPO、保健師、保育士などと広く連携し、地域参画型の母子に優しい新しいスタイルを導入します。これらの取り組みにより、多くの皆さんが「浜松で産みたい、育てたい、住みたい」と思える理想的な産科医療を実現したいと考えています」

さて、こうした医療体制の充実が図られる一方で、浜松市は妊産婦に対してどのような支援を行っているのでしょうか。健康医療部保健所健康増進課の兼子いづみ課長は語ります。

「浜松市の子育てケアは、母子健康手帳を交付する時からスタートします。妊婦さんに手帳をお渡しする際、質問紙による聞き取り調査を行い、それをきっかけに健康指導や子育てに関するアドバイスを行っているんです。また今年度からは、妊婦健康診査への助成を従来の2回から5回に拡充しています」

ただ、子育て支援は市民に至れり尽くせりのサービスを提供すればいい、というわけではありません。これについて、「市のさまざまな施策を活用し、若いこ

両親が自らの努力で「子育て力」を身に付けることが大事なんです」と述べるのは、こども家庭部子育て支援課の辰巳なお子課長です。

市民の「子育て力」養成のため、市が推進している施策の代表例は「フレッシュパパ応援セミナー事業」。これは「生まれたばかりの子どもに、どう接していいかわからない」という若い父親向けに、市内全域で開かれているものです。

「セミナーでの講座や実践（遊び、読み聞かせ）を通し、父親の子育てへの参加意識を高めてほしいと思います。その意味では、まさに「子育て支援は親支援」と言えますね」と辰巳課長は語っています。



「フレッシュパパ応援セミナー」には多くの若い両親が参加します